



よみがえる

福島県川俣町

前田遺跡

概要

遺跡名：前田遺跡（遺跡番号 308300098）

所在地：福島県伊達郡川俣町小綱木字前田

遺跡面積：16,300 m²（内 調査面積6,150 m²）

調査要因：国道114号（山木屋1工区）改良工事

調査期間：1次調査 平成30年7月18日～平成30年12月14日

2次調査 平成31年4月18日～令和2年3月10日

3次調査 令和2年4月15日～令和3年2月24日

4次調査 令和3年5月10日～令和3年10月13日

調査主体：福島県教育委員会

調査機関：公益財団法人福島県文化振興財団

Ver. 1

位置と地形

前田遺跡は、川俣町中心部から南東約3kmの国道114号と阿武隈川水系広瀬川支流の高根川に沿うように位置します。高根川段丘上と高根川からのいく度もの土石流や越流に伴う堆積によって形成された扇状地形上に立地しています。阿武隈高地西側裾の幅150mほどの狭い範囲に営まれた遺跡です。

前田遺跡の周囲には、縄文時代の遺跡が点在しています。



fig.1 前田遺跡の位置と周辺の遺跡

前田遺跡の年代

前田遺跡は、今から約4,800年前の縄文時代中期後半から約2,300年前の縄文時代晩期末までの約2,500年間にわたって、縄文人が断続的に活動してきた場所であることがわかつてきました。縄文時代中期後半に製作された漆器や木製品が、低地部から出土しました。縄文時代中期末から後期前半は集落が最大となった時期で、多くの土器や石器が出土しています。また、縄文人骨が残ったお墓も見つかりました。縄文時代後期後半から晩期末には、多数の柱穴が見つかりました。柱穴の中には、木柱の根元部分が残っているものもありました。



fig.2 【赤枠が前田遺跡の範囲】

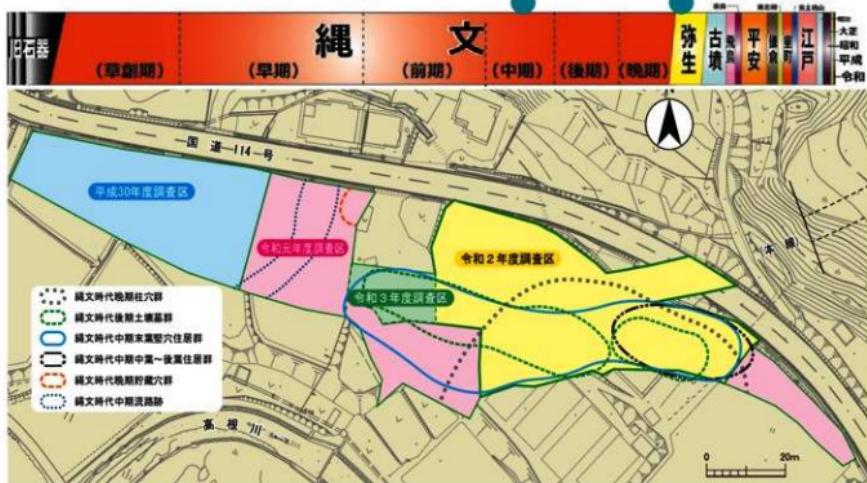


fig.3 前田遺跡の主な時代と遺構群の広がり

巨木を利用した木柱群 ～建物かモニュメントか～

前田遺跡調査区の中央から東端にかけて、多数の柱穴が見つかりました。これらの柱穴の多くは縄文時代晩期のもので、建物跡や柱列を構成していたと考えられます。柱穴の中には、根元が腐食しない状態の木材が当時のままの状態で100本以上残っていました。木柱の多くは丸木材を使用していますが、半分に割った材が用いられているものもありました。前田遺跡で最も太い柱には、直径60cmを超えるクリの巨木が使われています。木柱の底面や側面には、石斧による加工の痕跡が認められました。見つかった木柱は、柱の根元部分しか残っていないためどのような構造物であったのかは分かっていません。



fig.4 柱穴が見つかった状況



fig.7 石で木柱の周りを固めている柱穴

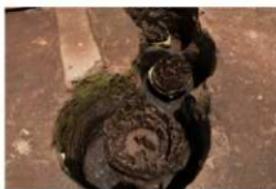


fig.5 近接する木柱



fig.6 直径60cmを超える木柱



fig.8 木材で木柱の周りを固めている柱穴



fig.9 半分に割った材を利用して木柱



木柱 クリ材

fig.10 (長さ:75cm 直径:36cm)



木柱 カヤ材

fig.11 (長さ:77cm 直径:53cm)



木柱底面に見られる
石斧加工の痕跡

fig.12

4千年の眠りから覚めた縄文人 ～前田縄文人骨は語る～

調査区の中央部周辺からは、穴を掘って埋葬した土塙墓や、土器の中に遺体を納め埋葬した土器埋設遺構が数多く見つかりました。これらのお墓には、人骨が残って見つかったものもありました。貝塚や洞穴遺跡以外の遺跡で、縄文人骨が見つかることは、非常に珍しいことです。見つかった人骨を詳細に研究すれば、埋葬時の年齢や栄養状態、生活環境なども見えてくることでしょう。4千年の眠りから覚めた縄文人は、私たちに何を語ってくれるのでしょうか…



fig.13 眠りから覚めた前田縄文人(頭骨)



fig.14 ほぼ全身が残る人骨(屈葬)



fig.15 密集する土器埋設遺構

土器埋設遺構に使用された縄文土器



fig.16-1 横倒しの土器埋設遺構
(土器内からは、人骨の一部が見つかりました)



fig.16-2



fig.17 縄文土器(中期末葉)



fig.18 縄文土器(後期初頭)



fig.19 縄文土器(後期後葉)



fig.20 底部に孔があけられた
縄文土器(後期前葉)

前田遺跡に暮らす ～縄文人のすまい～

調査区の東半分からは、縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての時期の住居跡が多く見つかっています。同じ場所に建て替えなどをしながら、繰り返し居住していたようです。縄文人のすまいは、円形に掘りくぼめられて造られた豊穴住居と呼ばれるものです。縄文時代中期には、中央に土器や石で組んだ「複式炉」と呼ばれる大型のいろりが配置されます。縄文時代後期には、石組みだけの小さい炉に変わっていきます。また、床面に平石を敷き詰めた敷石住居と呼ばれるタイプの住居跡も見つかりました。前田遺跡に住んでいた縄文人は、これらの住居でどのような暮らしをしていったのでしょうか…



前田遺跡で最も古い時期の住居跡
fig.21(縄文時代中期中葉)



石組みの複式炉
fig.22(縄文時代中期後葉)



複式炉が造られた住居跡
fig.23(縄文時代中期末葉)



重なり合う住居跡
fig.24(縄文時代中期末葉)



いしきまろ
石組炉がある住居跡
fig.25(縄文時代後期前葉)



しゃいしゃいじゅうきよあこ
敷石住居跡
fig.26(縄文時代後期前葉)

よみがえる縄文の色彩 ～前田遺跡の漆芸技術～

調査区西の低湿地からは、縄文時代中期の木製品がまとまって出土しました。漆塗りされた容器類やさまざまな木製品など、当時の生活用品が色あざやかに残っていました。漆塗りの木製品は容器類、蓋、すくい具（杓子）、豊櫛、弓幹などがあります。漆は3～5回ほど重ね塗りした丁寧な仕上げです。赤色漆の顔料は、ベンガラを用いていることがわかりました。

前田遺跡で見つかった容器類には、特徴的な形の把手が付いたものが多くあります。また、外側と内側で赤色漆や黒色漆を塗り分けしたものも見つかっています。



把手付鉢[ケヤキ]
(長さ:16.3 cm、幅:13.2 cm、高さ:10.7 cm)

fig.28 (黒色漆地に赤色漆の水玉模様が描かれています。) fig.29 (黒色漆地に赤色漆の2本線が描かれています。)



蓋または容器[カエテ属]
(長さ:42.2 cm、高さ:16.7 cm)



すくい具[ケンボナシ属]
(長さ:14.3 cm、幅:高さ:7.0 cm)
(口縁部に前田遺跡特有のデザインが見られます。)



漆塗土器出土状況
(あざやかな色彩が残っていました。)



漆塗土器(中期後半)
(渦巻模様を赤色に塗分けています。)



漆塗土器(中期後半)
(無文地に水玉模様を彩色しています。)

漆容器壺(中期後半)
(容器内に赤色漆が付着しています。)

fig.34 損傷のあるウルシ木 (▲は搔き傷)

前田遺跡からは、漆を入れた容器壺やベンガラを粉碎する際に使用した石皿、漆を搔いた傷が残るウルシ木が見つかっています。このことから、ウルシ木の育成管理、漆液の採取・精製、漆製品の製作までの一連の作業が行なわれていたものと考えられます。

前田遺跡の超絶技巧 ～デザインと実用性の間～

前田遺跡からは、漆塗木製品以外にも多くの木製品や編み組み製品が見つかっています。木製品の材料となる木材の伐採時に使用したと考えられる石斧や、下草などの刈り払いに使用した刈払具も見つかっています。細かく丁寧に編みこまれたカゴなども出土しました。これらは実用的でありかつ機能美にあふれたものです。一方、実用性と反するような過剰デザインの土器や、持ち手が8の字を描いたようなフライパンのようなすくい具（杓子）なども作られていました。また、祈りの道具なども数多く出土しています。前田遺跡の出土品は、機能的でかつ縄文人の豊かな感性をも表現しています。



**刈払い具
【ガマズミ属】**

fig.36 (長さ:104.1 cm、幅:5.4 cm)



石斧柄【ニレ属】

fig.37 (長さ:39.0 cm)



**編み組み製品(カゴ)
【タケササ類】**

fig.39 (現代でもザルやカゴに利用される編み方です。)



すくい具【ケンボナシ属】

(長さ:34 cm)

(美しく縫締に造られた8の字の把手が
作られています。)



縄文土器(中期後半)

(高さ:28.0 cm、幅:32.5 cm)

fig.42 (突起や渦巻が特徴的な土器です。)



ハート型土偶(後期)

(身長:16.8 cm、腹囲:1.8 cm、体重:200 g)

fig.40 (ほぼ全身が残っています。)



石棒(中期)

(長さ:26.1 cm、幅:10.4 cm、重さ:2,948 g)

fig.41 (土偶と一緒に祈りの道具と考えられます。)



**縄文土器 注口浅鉢
(後期初頭)**

(高さ:19.5 cm、幅:28.0 cm)

前田遺跡の魅力と展望 ～新たなる縄文時代研究へ～

前田遺跡を一言で表すと『出土品が非常に良く残っている遺跡』ということになります。前田遺跡は縄文時代中期から晩期に形成された遺跡ですが、土石流を含む砂質堆積物や地下水の影響により、風化や微生物による分解が非常にゆっくりと進んだようです。その結果、通常では腐食して現在まで残ることが難しい漆器などを含む木製品や縄文人骨、縄文土器に付着した炭化物や縄文時代の色彩までが、これまでに例を見ないほどあざやかに、そして豊富に見つかりました。

バラエティー豊かな出土品が見つかった前田遺跡については、土器・石器や木製品などの加工技術、動植物の種類や年代測定などを含め、さまざまな理科学的分野の研究者の協力を得て、多方面から研究を進めていくことが必要です。そうすることで、前田遺跡周辺の自然環境や遠隔地とのつながりなど、この地に暮らしていた前田縄文人の生活の一端が明らかになっていくと期待されます。その成果は、福島県のみならず日本の縄文時代観を再構築していくことになるでしょう。

前田遺跡の発掘調査で確認された遺構と遺物

主な遺構 穹穴住居跡：112軒、土坑（お墓、貯蔵用の穴など）：720基、

土器埋設遺構：206基、配石・集積遺構：162基ほか

主な遺物 縄文土器・石器・土製品（土偶など）・石製品など：約1,800箱

木製品類（木胎漆器・木柱を含む）・種実類・人骨ほか：約1,200箱

前田遺跡スナップ



これからも、前田遺跡の整理作業は継続していきます。日々、新たな発見があるのが前田遺跡でもありますので、本誌に記載された内容は、現時点における所見を記載したものであることをお断りさせていただきます。

図解 漆塗土器(中期後半)

福島県川俣町前田遺跡ガイドブック Ver.1

発行日：令和5年1月31日

発行：福島県教育委員会（〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16）

公益財団法人福島県文化振興財団（〒960-8116 福島県福島市春日町5-54）

編集：公益財団法人福島県文化振興財団

